

農民からみた除草剤問題

大規模化で依存度高く

農民運動北海道連合会書記長
富沢 修一

国民の命をつなぐ米や小麦、野菜などを農民は、病気、害虫、雑草から守りながら日々奮闘し収穫を迎えます。

病気には殺菌剤、害虫には殺虫剤、雑草には除草剤という農薬を使います。農薬の性能が高まったことで収量が増え、大きな面積で栽培が可能になり、草取りという重労働が激減し、農業のやり方も大きく変わりました。その一つが農薬をまく機械の登場です。最近では空中から高濃度少量散布ができる小型ラジコンヘリコプター、ドローンが使われるようになりました。

農薬は人為的に作られた化学物質であり、毒性がある危険なものです。「農薬で健康が損なわれた」ことを契機に農薬を使わない、または使う量を減らす方がいます。農薬は、散布のとき、農民にもかかります。言い方を変えれば、「命がけで農薬をまいている」と言えます。

グリホサート系除草剤は「土壌中でも分解する安全な除草剤」と宣伝され、大規模になるほど除草剤に依存するようになっていきます。国が勧める「生産性が高い農業」とは大規模農業であり、それは除草剤の大量使用の道です。

農産物の価格保障、所得補償で「身の丈にあった農業」「時間と体にゆとりがある農業」「化学物質に依存しない農業」「食料自給率引き上げで国産増産の農業」で命をつなぐ安全安心な食を実現するのが政治の役割だと思います。

北海道食といのちの会

会 長 久田 徳二
事務局（事務局長 山崎 栄子）
札幌市厚別区大谷地東 1 丁目 4 番 15 号
生活クラブ生活協同組合北海道内
電 話： 011-887-8891
メール： mito@club.s-coop.or.jp
フェイスブック：
https://www.facebook.com/Hokkaido.Syoku.Inochi513/

ゲノム表示求める意見書 全国5県 27 市町採択 道内は北広島、札幌、江別

全国の自治体議会からゲノム編集食品表示を求める意見書提出運動が始まっています。政府あての意見書を採択した自治体は現在、5 県 21 市 6 町で、北海道は北広島市、札幌市（2 回）、江別市です。

当会は、多くの自治体に意見書を採択してもらうため、5 月 12 日に町議 1 人、市議 4 人、道議 1 人と会員 5 人が参加して情報共有のオンライン会合を行いました。北広島市と札幌市の事例を聞き、その他の議会の情報交換を行いました。うれしいことにこの後、6 月に江別市が採択となりました。今後も繰り返し道内議員の皆さんとオンライン会合を行い、関心を持つ議員とのネットワークを大切にしていきます。

食品表示は、消費者が商品を選ぶ大切な情報であり、知る権利の基本です。採択された全国の意見書を分析し皆さんに情報提供できるようにしたいと計画しています。（山崎 栄子）

会費は下記から納入願います

○振込先：ゆうちょ銀行振替口座

■ゆうちょ銀行(郵便局)の場合

口座記号番号：00160-4-674332

口座名称：北海道食といのちの会

■ゆうちょ銀行以外の場合

店名(店番)：〇一九店(019)

預金種目：当座

口座番号：0674332

○年会費の区分は次の通りです。

1) 個人	1 千円
2) 構成員が 100 名未満の団体	3 千円
3) 構成員が 300 名未満の団体	5 千円
4) 構成員が 300 名以上の団体	1 万円



当会ホームページは左、フェイスブックは右の二次元コードからお入りください。



第5回北海道食といのちの会総会

■ゲノム編集表示意見書進めよう ■農薬除草剤使用の調査と抑制を ■「たねまきの日」で学びを常に

北海道食といのちの会（久田徳二会長）は 7 月 19 日、札幌市内で第 5 回総会を開き、2024 年度事業報告と決算、25 年度事業計画と予算案、役員選任案はいずれも原案通り承認されました。役員では、監査役の三部英二さん（札幌農業と歩む会）が退任しました。

「ゲノム編集」など遺伝子操作生物への表示を求める運動は前進しました。道市町議会議員と当会役員らがオンライン会議を初開催し、継続して論議していくことを確認しました。ゲノム表示を求める道内市町村議会の意見書採択は、北広島と札幌の 2 市に 25 年は江別市が加わりました。引き続き意見書採択が増えるよう努めていきます。

農薬除草剤などへの対応は、24 年まで道内外の専門家を招いて講演いただき、学習を重ねてきました。化学物質や農薬等の影響で食事や行動などが制限される人も加入する「子どもの健康と学びを守る会」との懇談会も行いました。

毒性の影響を受けやすい子どもを守ることは急務であり、自治体に使用実態記録を求める政府各省による「局長通知」を重視。自治体に記録開示を求める運動を開始しました。札幌市や北広島市などの使用実態の一部が分かり、調査を進め、使用や流通の現場に要望する運動も検討します。

一方、有機農業をはじめ自然と健康にやさしい食と農を広げる活動として取り組む「オーガニックファーム見学会」は胆振管内安平町の 3 軒の農家を訪問し、意見交換も行いました。引き続き、見学会を実施するほか、有機農家との協力、有機給食の普及拡大等に力を注ぎます。

解散した北海道たねの会が開催してきた「たねまきの日」を継承し、講演会や映画上映会などを 4 回開催しました。25 年度は「コメ騒動と食料安全保障」「菌ちゃん農法」などを学びます。



遺伝子、化学物質、有機について活発に議論した総会

■新役員＝敬称略。◎は新任、その他は再任
▽会長 久田徳二（北海道大学客員教授）
▽副会長 吾田英津子（DTP デザイナー）、高橋伸行（前北海道有機農業研究会事務局長）、富沢修一（農民運動北海道連合会書記長）
▽事務局長 山崎栄子（生活クラブ生協北海道理事）
▽役員 伊藤一弘（元農林水産省職員）、富塚とも子（さっぽろ食まちネット代表）、◎藤田真理子（会社員）
▽監査役 星野武治（循環ネットワーク北海道代表）、◎干場芳子（生活クラブ生協組合員）
▽相談役 麻田信二（元北海道副知事）、黄倉良二（元北竜農協組合長）、坂下明彦（北海道大学名誉教授）、西尾正道（北海道がんセンター名誉院長）

早急に体内汚染対策を

天笠さん 記念講演 「農薬とゲノム編集食品の不都合な真実」

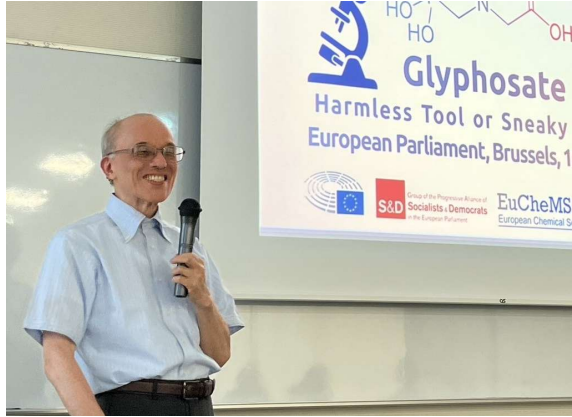
食といのちの会は7月19日の総会后、日本消費者連盟顧問でジャーナリストの天笠啓祐さんを講師に、記念講演「農薬とゲノム編集食品の不都合な真実」を開催し、会員外 17 人を含む 39 人が参加しました。講演要旨を紹介します。

化学合成農薬の起源は、第1次世界大戦の毒ガスでした。「薬」の文字が使われますが、殺虫剤、除草剤、殺菌剤など農薬の本質は生物を殺す機能です。戦後、日本は食料増産のため有機リン系殺虫剤が大量に使われ、農家の重労働の軽減と増産をもたらしました。一方で、農家の人々の健康を害し、環境を汚染、農薬耐性の害虫や菌が発生しています。

現在、最も使われているのはネオニコチノイド系殺虫剤とラウンドアップの主成分であるグリホサート。どちらも低毒性として売り出されたものの、現在は強い発がん性をはじめさまざまな毒性が判明しています。

2023 年の市民団体の調査では、成人 23 人の毛髪検査で12人からグリホサートが検出され、学校給食を食べている50人の子どもの尿検査で全員からネオニコチノイド系農薬が検出されました。早急に体内汚染対策を実施すべきです。

憂うべきことに、新しい農薬としてPFASを含む有機フッ素系農薬、生物が持つアポドーシス



農薬の危険性について訴えた天笠さんの講演会

遺伝子(突然死を誘発する)を抑制する遺伝子を壊すことで、殺虫剤として機能させるRNA農薬の開発が加速しているそうです。

ゲノム編集食品は、日本では表示義務がなく流通していますが、シシリアンルージュ種トマトやリージョナルフィッシュ社のマダイ、トラフグ、ヒラメは食味が悪く、市場の評判は悪いそう。しかし、続々と開発が進むゲノム編集食品を止めるためには、表示制度が必要です。

天笠さんは「自然と共生し、戦争のない平和な時代、差別のない社会、そして健康を未来につないでいくことがとても大事です」と講演を結びました。

会員の皆さんと学び、健康な未来を目指す活動をさらに進めていきたいと思いました。

(富塚 とも子)

8 月に有機ファーム見学会

第3回オーガニックファーム見学会を8月30日に上川管内比布町、当麻町で開催します。

令和の米騒動と言われる昨今。お米農家から「ホントの話」を聞いてみませんか。比布町の今野農園は今年、有機米を始めました。その経緯とは。当麻町のグリーンライフは、北海道の有機栽培を長年けん引し、自社工場も持っています。

昼食はエゾシカ肉と有機野菜のカレーを楽しめます。農業に詳しくない人も気軽に

参加ください。農地を見て、農家の声を聞くだけでも「視点」が広がります。小さなお子さんも大歓迎です。参加費2千円。

(高橋 伸行)

2025 8/30(土) 10:30 比布町集合 ¥2,000 (エジカカレー付き)

今年も救アツ！おコメのごはんを守ろう！！

5月の「たねまきの日」報告

大地再生に挑む

映画「君の根は。」と語りのひととき

5月31日の「たねまきの日」は、札幌市北区のエルプラザで開催し、大地再生（リジェネラティブ）に挑む人びとを描いたドキュメンタリー映画「君の根は。大地再生に挑む人びと」の上映と、日本語版制作者であり映画にも登場するメノビレッジ長沼のレイモンド・エップさん、荒谷明子さん夫妻＝写真＝によるトークの二部構成で開催しました。

映画には、コンブを海に植えて海洋環境を再生する漁師、牛の放牧で土壌を蘇らせる牧畜農家、微生物を育てる不耕起農法を実践する農家などが登場。レイモンドさんは、ライ麦やクリムゾンクローバーなどのカバークロップ（土壌侵食の防止や有機物の供給などを目的とした収



穫対象としない作物）を用い、土壌菌を育て炭素を土に固定することで地球温暖化対策につながる農法を紹介しました。収穫後に根を残すことで土壌菌のすみかを守り、土の団粒構造を回復させる工夫が印象的でした。

質疑応答では、自宅庭の不耕起や、段ボールで土を覆い隠して土壌を保護しているといった身近な工夫にも話が広がりました。約80人が参加し、未来への希望が持てる会となりました。

(伊藤 一弘)

映画公式サイト：
<https://www.yukkurido.com/towhichwebelong>

9月は「コメ騒動と食料安保」 JCIに協力、久田会長講演



コメ騒動と食料安保の行方
米国産米輸入、備蓄と増産、所得補償は…

2025年 9月6日(土) 18:00~20:00 (17:30開場)

会場 札幌市教育文化会館3階 研修室305 (札幌市中央区北1西13)

参加費 1,000円 大学生以下500円 (資料代含む) JCI会員は無料

講師 久田 徳二氏
北海道大学農学部 元北海道食といのちの会 会長

●昨夏、おコメが店からなくなり米価が急騰しました。「令和のコメ騒動」とも言われる異常事態です。長年、コメの生産を抑制してきた政府は、当初「不足していない」と主張しました。しかし、国際米価の増大、各種農薬などから懸念的な「不足」の事実も認定できなくなると、政府の備蓄米の放出に踏み切りました。放出により価格は下がりましたが、今度は備蓄米も底が見え始めました。農家にとっては価格が安すぎるのも困ります。

●米価打開の鍵を握るコメの産地は、他産地ではありません。生産者の減少と高齢化が進んでおり、このままでは来年もコメ不足は続くと言われます。トランプ関税の増徴を受けて、米国産米の輸入拡大論が浮上しています。わたしたちの主食であるコメは、そして日本の食と、食料安全保障は、この先どうなるのでしょうか。

●北海道の「食と農」を研究する久田徳二氏(北大客員教授)がコメ問題と「食料危機・食料安全保障」の本質と今後を解説します。

主 催:日本ジャーナリスト会議(JCI)北海道支部
協 力:北海道食といのちの会
問い合わせ先 jci.hkd2022@gmail.com(JCI北海道支部、090-7050-8256(高田))

次回「たねまきの日」は9月6日、日本ジャーナリスト会議(JCI)北海道支部に協力し、当会の久田徳二会長が「コメ騒動と食料安保の行方 米国産米輸入、備蓄と増産、所得補償は…」と題

し講演します＝ポスター＝。

揺れる日本のコメ政策と食料安全保障の課題を北海道から考えます。概要は下記の通り。詳しくは当会 HP をご覧ください。

日時：9月8日(土) 18:00~20:00

場所：札幌市教育文化会館 3F 研修室 305 (札幌市中央区北1西13)

参加費：一般 1000 円／大学生以下 500 円／JCI 会員無料

申込不要・先着 150 人。直接会場へ。

主催：JCI 北海道支部

11 月は菌ちゃん農法

11月の「たねまきの日」は、胆振管内安平町で有機農業「菌ちゃん農法」を実践する高林農園の高林優一さんの講演を予定しています。詳しくは、決まり次第お知らせします。

(伊藤 一弘)